

時評

〈10月〉

山田健太

老舗出版社・新潮社の発行する『新潮45』が休刊した(事実上の廃刊)。事の始まりは、回誌8月号掲載の衆議院議員・杉田水脈寄稿文である。文中の「LGBTは生産性がない」と読める一文に、同氏の過去の発言などがあつまり、同じ

国会議員である屋江が亭主ほかの批判の声がネット等で広がった。その後、回誌10月号が杉田擁護の特集「そんなにおかしいか」杉田水脈「論文」を組むことで、さらに問題視の声が広がった。特集で小山栄太郎は、「LGBTの権利を擁護するなら、痴漢が触る権利を社会は保障すべきではないか」といった趣旨の、下品かつ意図的な差別感情を露わにした文章を登載

している。ここにきて、社内公式ツイッター「新潮社出版部」文芸にすら疑問が示されるにきて、他メディアも大々きな扱いをする中、佐藤隆信社長の「10月号企画は常識を逸脱した偏見と認識不足に満ちた表現」との談話が公表された。ただし、これが、具体性に欠き謝罪の文意もなかったことから責任放棄との批判を受けることになる。

出版界のくイトビジネス

問われる編集倫理

『新潮45』騒動から学ぶこと

とにかく、問をあげることなく休刊発表。社長と編集担当役員との減俸処分という流れを辿った。休刊後も、その騒引きの仕方などを巡って、社内抗議活動が行われるなど余波が続いている。なお、本人である杉田議員は謝罪や撤回はないほか、所属政党の民進党も当初は放置の構えを示すなど(のちに注意)、むしろ外目からは容認の雰囲気醸し出した。

それは、沖縄くイトも含め、とりわけ近年の大きな特徴であるからだ。ただし、その中間に位置する出版社(編集者)の編集倫理に特にフォーカスして、問題を整理しておきたい。

業界地図

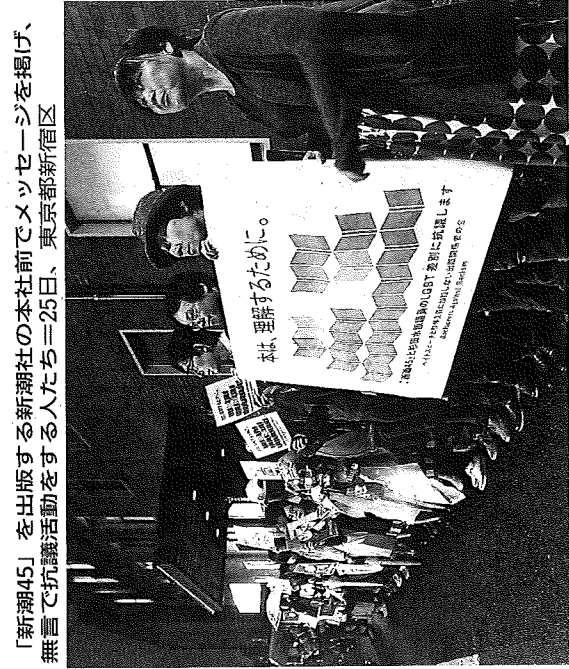
回誌の休刊告知文では、部数低迷に直面し十分な編集体制を整備しないまま刊行を続けだことを原因としているが、貧困な職場環境

であるのが月刊誌総論ともいえる。『月刊現代』『諸君』『諺』と休刊が続くなかで、『WILL』『Hanada』『正論』の極端な右寄り路線に感化される形で、『新潮45』『ICE』が右傾化していたのが昨今の特徴だ。ほかには、『文藝春秋』『中央公論』『潮』があるが、これらも総じて保守系論壇誌ということになる。リベラル系は『世界』が孤島を守っているといえる。よく

嫌韓ムームのさなか、新潮社も含め少なからぬ編集者は、多様性こそが出版の特徴で、嫌韓もあればその反対もある、といったバランスをとってほしいと発言していた。まさに昨今の新潮誌の編集タイトルは、双方の路線を薄らさせるという点で、この考え方を地で行くものであったと言えるだろう。いわば社会のメジャーメディアがくイト論をまき散らし、書店の目立つ棚でく

イト本を売り、社内り広告をくイト員出しの週刊誌を売りを続けたことで、社会のくイトとくイトの価値を下げ、今日の社会の分断を呼ぶもろろ差別言説を正当化するかの空気を作った責任がある。今回の騒動が、くイトクイトの職域を狭めたことは残念至極だ。しかしそれ以上に、破壊した社会の雰囲気や正常化させる役割を、壊した本人が負うべきであって、それを放棄するもそれはその責任は極めて大きい。休刊をいつけじめというならば、それはよしだ。しかし、こちらであれば、当然ながら『新潮45』以上の投資を健全な言論公共空間の再構築のために投じるべきである。それが日本を代表する表現の自由の担い手である出版社の社会的責務である。

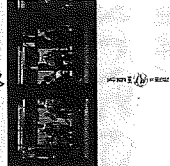
その意味で出版社は何をしようとしても、時代は終わっていることに気が付かなくてはなるまい。取材のためなら何をしてもよい時代が終わったのと同じで、今は取材過程の透明性が強く求められる。同じように、出版意図の正当性が求められる。回誌のように、出版意図の正当性が求められる。回誌のように、出版意図の正当性が求められる。回誌のように、出版意図の正当性が求められる。



「新潮45」を出版する新潮社の本社前でメッセージを掲げ、無言で抗議活動をする人たち=25日、東京都新宿区

文芸インタビュー マイケル・エメリックさん 日本文学研究者

鋭敏な米国人・日本文学研究者、マイケル・エメリックさんが日本での初の著作『てんこまゝ』文芸は目撃して(書評) (15) 卯書



領員が響きにやまよびなつた最初の心配の種がいま花を聞いて咲いています」

日本社会と響く無意識を

ザルズ校(UCLA)上級准教授として、作家春日日出典さん、柴崎友香さんらをお招きして滞在された。昨年春は早稲田大と協力して野村万作さん、野村萬葉さんと狂言師を呼び、UCLAやロス市内で講演

音信

最初の一步を経て、次やること重要「くるり」の岸田さん高野市交響楽団が201



新作「交響曲第三番」は12月、前作と同様に岸田さんごの指揮で高野が初演。第一番は全5楽章、約55分の大作だが、第二番は少々短くなる想定という。出身地のオーケストラと再タッグを組む岸田さん。多

「約4週間に集中して楽曲化してきた」と語る岸田さん(高野市)

列車、海を渡

こめかみからつなごう髪がなびている手の先には白ひた末硝子、座席、乗客、アリアムの中の絵画列車の端から端まで波が寄せる音をなぞる列車が伸びる仕舞い込んだ年月を壊れた一つ一つがみ

次の縁にふつかり星の端を握りしめてどこかに溶けてしまふやくにり処がわ解離した抜け殻のま

列車が静く海面を切る車輪白く白く白くしぎ

海のしぎが目に人真実は一体どんな角膜は由縁をふらひ

海のしぎが目に人キーンと破綻音がし

深海のメロリーが響

列車が渡る打ち上がる大花火の火の粉の彩りを浴び

じまでも煙々を伝

ち・いろは 1
2009年に刊行し
ンで第33回出口
う曇ったら」など。

◇第1、第

の音楽を巧みに取り入れ
楽曲を発表している。「
るりの曲や楽曲編成は